

第3回：ジンバブエのパーマカルチャー

「パーマカルチャー (Permaculture)」という言葉は permanent と agriculture から成る造語で、オーストラリアのビル・モリソンらによって提唱された、自然との共生や地球環境への配慮を重視し、人間にとって恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系である。自然に逆らうのではなく、自然に従うという理念で、生態学的に健全で、経済的に成立一つのシステム、長期にわたって持続しうるシステムを作ることをめざしている。

パーマカルチャーのデザインで作った「畑」は、ちょっと見には「ジャングル」のようにも見える。いわゆる「普通の畑」のようには整然としてはいない。多年生の樹木や灌木、草本（野菜や草）、菌類、根系等に基礎を置いた多種作物栽培で、多様性を持たせることでより安定な系を求めている。また、チッソ肥料を使う代わりに緑肥やマメ科の木を使う、殺虫剤を使う代わりに生物によって害虫をコントロールする等、生物資源を活用して化学肥料や殺虫剤を減らすことをめざしている。ただ、パーマカルチャーは、単に有機農業や資源循環型の複合農業を薦めているだけではない。例えば地形や風向き、洪水時の水の流れ方等を考慮した家の建て方、あるいは畑のデザインもその重要な要素の一つであり、生活のすべてに対する工夫が含まれる。その意味でパーマカルチャーは、単なる農法の一つではなく、「生き方」そのものである、といえる。

パーマカルチャーは現在、世界各地でその地域の自然や風土、社会環境に適したやり方で広がり始めている。ジンバブエでは Natural Farming Network (NFN)、PELUM (Participatory Ecological Land-Use Management) Association 等の NGO がパーマカルチャーの実践や普及（トレーニング）に取り組んでいる。NFN の一員である Fambidzanai Permaculture Centre は首都ハラレ郊外に 40ha の敷地のトレーニング・センターを持っている。ここでは、持続可能な農業の紹介、農薬を使わない害虫管理、参加型農村評価手法、有機農園、養蜂、総合的な資源管理 (Holistic Resource Management) 等のトレーニングコースがあり、それぞれ 1～2 週間程度である。これらのコースには国内・海外からの参加者があり、宿泊施設もある。

また PELUM は、東部・南部アフリカ 10 ヶ国に支部があり、住民参加型の持続的資源管理を目的として 1992 年に設立されたネットワーク型 NGO である。いくつかの NGO がメンバーとして参加しており、それぞれ地域 (Community) に根ざした持続可能な農業や村落開発の実施をめざしている。PELUM は、ワークショップの開催やトレーニング実施に重点を置いていて、最近ジンバブエ大学に「PELUM College」という「持続可能な農業」に関する 2 年間の長期コースを開設した。これは講師陣が大学関係者だけでなく、NGO や農業省 (AGRITEX) から参加するというユニークなものである。



パーマカルチャーの畑



チキントラクター（鶏による「除草、施肥」）